

氏 名 大内 英範

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1022 号

学位授与の日付 平成 19 年 3 月 23 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本文学研究学専攻  
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 源氏物語鎌倉期本文の研究

論文審査委員	主査	教授	田淵 旬美子
		教授	伊井 春樹
		教授	安永 尚志
		教授	神野藤 昭夫（跡見学園女子 大学）
		教授	横井 孝（実践女子大学）

## 論文内容の要旨

本論文では源氏物語の本文について、特に鎌倉期写本の本文を分析することで、少しでも古い本文を探ろうとつとめた。現存最古写になる鎌倉期写本の本文および書写態度を精緻に分析し、関わりのあると思われる他本と比較したりすることで、現存しない親本の本文を復元し、祖本の姿を推定しようとしたのである。

序では、これまでの源氏物語本文研究が、どのように進められてきたか、どこまで達成されているか、残されている課題は何か、本論文で論じたいことは何か、ということについて述べた。

すなわち、池田亀鑑によって一応の達成をみたと思われていた源氏物語の系統研究が、現在では見直しの必要に迫られている。池田系統論の唱える系統軸のひとつである、「青表紙本」という概念が揺らいでいる。「河内本」という系統軸についても、わかっていることは多くない。さまざまな本文がいまに伝存していることを再確認し、あくまでも本文の書承という点にこだわって、現存諸本の相関関係を少しでも明らかにしてゆくことが必要であるという点を打ち出し、本稿の基本的な方向性を述べたものである。

本論文第一部では、そうした鎌倉期写本の調査結果から、大島本の独自異文を支える写本や、逆に大島本が代表する「青表紙本」本文とは異なる本文をもつ写本など、多様な源氏物語世界があったことを論じた。

さらに、従来系統論におけるもう一つの軸であった「河内本」を代表する写本である、尾州家本についても論じた。その問題点を整理した上で、本文訂正箇所や特異な異同に注目し、「河内本」という系統軸の中での尾州家本の位置づけを根本的に捉えなおす必要性を明らかにした

このように、鎌倉期に多様な本文が存在することは事実だが、どれがより古い本文なのか。大島本を最善本とする根拠たる、池田亀鑑の研究を見直さなければならないとすると、我々はどの本文で源氏物語を読めばよいのか。

そのような問題意識のもと、第二部では、本文訂正を注意深く検討することで、書写態度を推定し、更には親本本文がどの程度推定できるか論じた。特に池田本（天理図書館蔵伝二条為明筆本）、高木本（東洋大学蔵伝阿仏尼筆本）の二本が、それぞれの親本に極めて忠実な書写であることを証明した。加えて、書承関係の明らかな二つの写本を比較して、親本の本文訂正がどのように書写されるのか、そのバリエーションを検討した。特に注目されたのは、親本のミセケチ傍記の書写の際、訂正後本文を書写した後に、親本でミセケチにされた文字を小字で傍記するケースである。これは、一見して補入記号のない補入に見えるものである。池田本や高木本に限らないが、補入の際の記号の有無が、何によるものなのか、これまで明確ではなかった。だが、親本で捨てられた文字を、何らかの理由で残しておきたい場合に、小字で傍記しておくというのは、あり得ることであろう。前章までに保留とした箇所のいくつかについて、そのように考えることで合理的に解決可能であることを検証し、親本本文を復元する上での一つの方法として、有効性を認めるに至った

第三部では、第二部での検討結果を踏まえて、池田本帯木巻・高木本の二本が極めて近い段階で共通祖本を持つことを論じ、さらに、池田本帯木巻の祖本本文はいわゆる青表紙本と一括される写本群の本文の台座であり、その本文を忠実に伝えるのが池田本であるこ

とを証明した。さらに、表記などに注目すると、その本文は定家以前、すなわち平安期まで遡りうる、平安期本文を伝えるものであることを明らかにした。これは従来考えられてきたいわゆる青表紙本本文生成過程に、再考を促す結論である。

以上、現代の我々が一般的に接している源氏物語の本文は、十五世紀書写の大島本を主底本としたものであるが、後代の書き入れ注記などを反映したものであるということは、あまり知られてはいない。また、序に述べたように、大島本を最善本と結論した池田亀鑑の系統論は、その矛盾が指摘され、見直しを迫られている。ということは、大島本で読む意味そのものに、再考を迫られているといえる。第一部で論じたように、源氏物語には多様な本文が伝存している。大島本の書写時期よりも以前の、十三世紀つまり鎌倉期書写本で、いまだに調査の及んでいない写本も、まだ多く存在しているのである。そうした写本の調査は、今後も続けていかななくてはならない。

一方、大島本の本文で読む意味に疑問があるとしたら、多様に存在する本文のうち、我々はこの本文で源氏物語を読めばよいのか。作者による原本の復元などということが現実的ではなく、伝存する本文が多様な場合、その古さというものに価値をおくのは、一つの答えになり得ると考える。もちろん古い本文だから良い本文だとは単純にはいえないのであるが、たとえば伝存するいくつかの写本の共通祖本が想定できるとして、その共通祖本の本文を現在に伝える写本があった場合、その本文で読むことの意味は認められるであろう。

そのような考えから、第二部、第三部で、池田本（帚木）と高木本という二つの写本に共通祖本が想定可能であること、その共通祖本の本文が、現在「青表紙本」と一括されている写本の本文の台座となっていることを論じ、その本文は定家以前すなわち平安期本文である可能性を指摘したのである。

本論文の結論としては、帚木一巻については、平安期本文を伝える池田本で読むことを主張したい。そして、さらに他の巻についても、本論文で用いた手法によって、現存写本の本文の中から古い本文、平安期本文を伝えるものを見つけ出せるものとする。

## 論文の審査結果の要旨

『源氏物語』は古典文学の中で最も著名な作品の一つでありながら、その本文については、成立から五百年後の室町時代に書写された、青表紙本系統の大島本によって読むのが大勢である。しかし、近年では、定説化している池田亀鑑の系統論（青表紙本・河内本・別本の三系統に分類する）に疑義を呈し、かつ、無批判に大島本に依拠して作品を論じることを見直す動きも出てきている。本論文もそうした本文研究の流れに位置付けられるものであり、書写年代をより遡及する写本を微細な部分に至るまで克明に調査し、より古い本文を模索する立場に立つ。『源氏物語』本文研究の問題点を把握した上で、新たな方法・視点を模索しつつ、未紹介・未翻刻の鎌倉期の『源氏物語』古写本を調査し、各伝本の持つ本文の位置付けを丹念に行い、大きな成果を挙げている。

その第一は、従来の系統論からは十分な評価を与えることができなかった鎌倉期写本の本文が、それぞれに多様な特質を持つことを具体的な検証作業を通して明らかにしたことである。具体的には、橋本本・甲南女子大本（梅が枝）・ハーバード大本（蜻蛉）が、青表紙本・河内本とも異なる独自の本文を伝える写本であること、さらに尾州家本の検討からは、河内本のあり方自体も確たる本と想定するには慎重であるべきことなどを説く。

第二は、それら鎌倉期の写本から、親本推定の方法を探り、そこから平安期に遡る本文の復元を試みている点である。具体的には、主に高木本の本文の書写様態を明らかにすることによって、親本推定の方法を探り、そこで浮上してきた親本の本文が、池田本と極めて類似していることに注目し、池田本の本文の検証を通じて、青表紙本の台座ともなった平安期の本文を浮かび上がらせようとしている。その成果は、「池田本・高木本の共通祖本の復元」として資料に掲げられている。

本論文は、従来の系統論を一旦否定した上で、鎌倉期の伝本を精査吟味することを通じて、個々の写本の定位を試みるほかないという学的認識の上になされたものである。その認識のもとに、各写本の特質と位相、その親本の様態を明らかにしているが、そのプロセスにおいては、膨大な作業と分析が背景にあり、かつ、高度な専門的手法が駆使されている。その努力と判断力にも一定の評価を与えることができる。

一方で、『源氏物語』はさらに多くの写本を有しており、今後どのように取り組むかという指針を明確に持つべきこと、古い本文へ遡及・復元することの意味をさらに深化させ明瞭にすべきこと、この成果により『源氏物語』の読みと評価がどのように変わるかをさらに意識化して有機的に論ずべきこと、論理展開において一部不明瞭な部分を残していること、今後は『源氏物語』以外の本文のありかたと比較検討する視点を持つべきこと等々の諸点が今後の研究課題として指摘された。

以上から、本論文審査委員会は、本論文が現在の『源氏物語』本文研究に新たな視野を拓いた力作であり、また、今後の研究の進展と深化をさらに期待させるものであることを高く評価して、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい論文であると判断した。